



Data

監督：ティムール・ベクマンベトフ
 製作：ティム・パートン
 原案・脚本：セス・グレアム＝スミス
 出演：ベンジャミン・ウォーカー／ドミニク・クーバー／メアリー・エリザベス・ウィンステッド／アンソニー・マッキー／ジミ・シンプソン／ルーフ・アス・シーウェル／マートン・ソーカス／エリン・ワッツソン

👁️👁️ みどころ

南北戦争終結後のリンカーン大統領の演説「人民の、人民による、人民のための政治」はあまりにも有名。しかし、それには「・・・を地上から消滅させない」という続きがあったらしい。さてその意味は？

昼は大統領、夜はヴァンパイア・ハンターという着想は面白いし、リンカーンが奴隷解放に執念を燃やした真の理由(?)も興味深い。しかし、私は正直ヴァンパイア映画はいい加減飽き飽き。そうでない人には本作はお薦めだが・・・。



■□■たしかに着想は面白いが・・・■□■

南北戦争終結後のエイブラハム・リンカーンがゲティスバーグで行った「人民の、人民による、人民のための政治」という一節はあまりにも有名だが、実はそこには「人民の、人民による、人民のための政治を地上から消滅させない」という続きがあったらしい。その続きの言葉を意味シンと捉えたうえ、これをヴァンパイアとの戦いの苦悩を表現したものだと思えば、そこから生まれてくるリンカーンの本性は？それは、昼は大統領、夜はヴァンパイア・ハンターという奇想天外なもの。そんな着想を映画にすれば、たしかに面白い・・・。

■□■ヴァンパイア映画そのものに、いい加減飽き飽き・・・■□■

ハリウッドではいつの時代でもヴァンパイア映画は人気だが、『トワイライト～初恋～』（08年）の大ヒットとそのシリーズ化によって近時はその傾向が強い。もっとも、『モールズ』（10年）はちょっと異色のヴァンパイア映画だった（『シネマルーム27』174

頁参照)が、それでも所詮ヴァンパイア映画。CGや3D技術の進歩によって、ヴァンパイアVSヴァンパイア・ハンターの対決シーンやヴァンパイア同士のド派手なアクションは手に汗を握るものになっているが、それも所詮ヴァンパイア映画。これだけヴァンパイア映画が増えてくると、いい加減飽き飽き・・・。

■□■仕事と勉強の他、こんな特訓も・・・■□■

国政への進出を決定した「大阪維新の会」の橋下徹代表は、大阪市長と「日本維新の会」の代表という2足のわらじを、趣味の時間や睡眠時間を削ることによって問題なく履くと宣言。たしかに時間は使いようだから、それは可能かもしれない。

ニューオーリンズのまちにやってきたばかりの青年リンカーン(ベンジャミン・ウォーカー)を雇ってくれた雑貨店店主・ジョシュア・スピード(ジミ・シンプソン)の店の仕事と、弁護士になるための勉強の他、ワイルドで謎めいた魅力を持つプレイボーイの大富豪ヘンリー・スタージス(ドミニク・クーパー)を師匠としてヴァンパイア・ハンターとしての特訓を積むリンカーンを見てると、そう思えてくる。もっとも、銃の使い方がからっきしダメなリンカーンが、斧の使い方であまり一流になれるとは、ちょっと意外だが・・・。

■□■リンカーンの奴隷解放は何のため?■□■

本作が興味深いのは、大統領まで上り詰めたリンカーンが奴隷解放に執念を燃やしたのはなぜか?という根源的問題も、対ヴァンパイア問題に求めたこと。本作冒頭に登場する冷血な奴隷商人になりすまし、リンカーンの母親を殺害したジャック・パーツ(マートン・ソーカス)も、ヴァンパイアの首領として何千年も生き抜いているアダム(ルーファス・シーヴェル)も奴隷解放には絶対反対。なぜなら、奴隷たちの売買はヴァンパイアの資金源になっていたうえ、奴隷はヴァンパイアの食料源になっていたからだ。このように奴隷問題についてヴァンパイアは南部同盟と共通の利害関係にあったから、ヴァンパイアと南部同盟は結託してリンカーン率いる北軍と戦うことに。

なるほど、南北戦争はそういう原因で起こったのか!そしてまた、リンカーンの奴隷解放の信念は人道的見地からだけではなく、ヴァンパイアからの解放という隠れた目的があったのか!

■□■「師匠」との決別という試練は?■□■

リンカーンがヴァンパイア・ハンターになるについて師匠のヘンリーとの間で交わした契約(条件)は、「生涯、友人も家族も持たない」ということだった。これは、ヴァンパイア・ハンターの仕事は人間社会の裏側で行われる孤独な仕事だからだ。したがってある日、将来の夫人となる運命の女性メアリー(メアリー・エリザベス・ウィンステッド)に対して、「自分は夜もヴァンパイア・ハンターとして働いているのだ」と打ち明けたことから、メアリーとの間で恋が芽生え始めると・・・?また、映画冒頭に紹介される幼馴染の黒人

ウィル・ジョンソン（アンソニー・マッキー）と再会したことによって、ウィルが政治の世界に歩を進めるリンカーンの良き片腕になってくると・・・。

リンカーンが個々のヴァンパイア退治ではなく、政治の力によってヴァンパイア全体を退治しようという方向に転換していくと、師匠のヘンリーとの仲は？メアリーとの結婚や大統領選挙への立候補は明らかにヘンリーとの契約に違反するため、その後リンカーンは次第に師匠と決別することになっていくが、リンカーンはその試練を乗り越えることができるの？また、それに対するヘンリーの対応は？後半からクライマックスにかけてのリンカーンの成長度を計るについては、そんな点にも注目を！

■□■この二大アクションは興奮できる？それとも・・・■□■

本作のアクションの売りは2つある。1つは中盤に見る、リンカーンとバーツとの馬上の戦いであり、もう1つはクライマックスで展開される、燃えさかる列車内でのリンカーンとアダムとの戦いだ。VFXやデジタルの技術をフルに使い、3Dの効果を最大限発揮したこれらのアクションはたしかに楽しいといえれば楽しいが、あまりにも現実離れしているため、バカバカしいといえればバカバカしい。手に汗握る激しいアクションが売りの『ボーン・レガシー』（12年）のアクションにはたしかに興奮したが、さてあなたは本作が魅せるこの二大アクションに興奮できる？それとも・・・。

ちなみに、ヴァンパイアの南軍への加勢によって一気に劣勢に陥った北軍が最後に挽回することができたのは、ある日リンカーンがヴァンパイアの「ある弱点」をハッキリ掴むことができたため。したがって、列車内での戦いは一種の「おとり」で、実際はメアリーたち女性部隊が果たした役割が大きかったことが明らかになるから、それもこのアクションの価値を下げる1つの要因に・・・？

2012（平成24）年9月12日記